

浄土

1989-8

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省 特別扱承認雑誌）第三二五号
平成元年七月二十五日印刷 平成元年八月一日発行
第五十五卷 八月号





八月の秀句

はまなすの数珠のくれなる魂迎え

大野 林火

万燈の花に縫りし子供かな

山口 青邨

姉の子の墓草深し椎の下

高浜 虚子

八月号



我れ五濁惡世において、此の難事を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得て一切世間の為に、此の難信の法を説く。

——『阿弥陀經』

目次

法 話

盆施餓鬼を迎えて(二)……………川 村 悠 穂……(2)

お 盆 に 想 う……………正 村 瑛 明……(8)

お盆とお施餓鬼法要に因んで(上)……………金 子 寛 哉……(15)

＜谷口潮原作・短篇小説＞

「みかえり阿弥陀」紹介……………(24)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <29>

海と山の狭間で

……………木 下 隆 一 ……(26)

——我が思い出に住む犬たち(15)——

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(8)

……………松 浦 行 真……(33)

——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

法 話

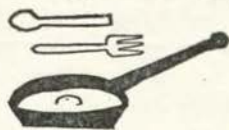
盆 施 餓 鬼 会 を 迎 え て (二)

川 村 悠 穂

(静岡市西福寺住職)

空気の中にある酸素は人間にとっては欠くことの出来ない要素ですが、植物は人間の吐き出す炭酸ガスをとって、反対に新鮮な酸素を人間に供給してくれます。かぼちやの花が咲きますと、蜂や蝶が群がり、雄花のもつ甘い蜜を求め、その代わりに雄花の花粉を雌花に運んでくれます。

このように私達は、人間社会だけでなく、大宇宙のいろいろな力により生かされて生きているのであります。商売するのもこの品物を売って儲けてやるのだ、ただ金さえ儲ければよいという気持ですと、悪い品物でも、またそれによって迷惑かけても、平気で売りに出すことになりますが、私達も、みなさんに生かされているのだと思え



ば悪い品物を売ることは出来ない筈です。そして、有難うございますという感謝の生活になる筈です。私達の生活は、殺し合いの生活でなく、生かし合いの生活であり、そうなれば、私共も長生き出来ることであり、明るく正しく仲良い社会となつてゆくのであります。

私達が明るく正しく仲良い暮らしを願ひ、また健康で人から愛されるような円満な人でありたい所から、施餓鬼壇には五色の幡に五如来が祭つてあります。

南無宝勝如来 除慳貪業福智円満

南無妙色身如来 破醜陋形円満相好

南無甘露王如来 灌法身心令受快樂

南無広博身如来 咽喉広大飲食受用

南無離怖畏如来 恐怖悉除離餓鬼趣

そうして、青・黄・赤・白・黒が仲良くしている姿です。

阿弥陀経には、池の中に蓮華あり、大きな車輪のごとし、青色には青光あり、黄色には黄光あり、赤色には赤光あり、白色には白光あり、微妙香潔なり、とあります。それらが調和されている世界、これが極楽だと示されています。

私達仏教徒は拝む時、またお互いの挨拶の場合、合掌して挨拶します。合掌とは

「たなごころを合わす」といって手の心を合わすのであります。片方の手の心が仏さまの心、片方の手の心が私の心、私の心と仏さまの心が、心と心が合わさる、これが合掌であります。そして、私の心が仏さまに通じ、仏さまの心が私に通じるということとであります。坊さん同志が挨拶する時、インドの人が挨拶する時は合掌して挨拶します。お互い同志が合掌して挨拶する時は、片方の心があなたの心、片方の心が自分の心と思って、合掌するのであります。心と心が通じ合えば、お互い仲良く、明るくつきあうことができるのであります。

心とは、コロコロしているから心だといっています。それでは、私達の心とは、どういうものであるかというと、仏教では、十の世界に分けてあります。この十本の指でいいますと、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、声聞、縁覚、菩薩、仏という世界です。どんな人でも、餓鬼や畜生の心もあれば、菩薩や仏のような心があるのであります。それでありますから、あんなえらい人があんなことをして調べられるとか、刑務所や少年院に入っている人が、あんな善いことをしてとかいうことがあるのであります。

餓鬼や畜生の心が強い人は、餓鬼や畜生のような人となり、菩薩や仏の心が強い人は、そのような人柄となってゆくのであります。私達は、そのあるがままの心を調和し私達の目標である仏になるように、努力するのであります。

そこで、私達が何かを始める時とか、終る時、または挨拶する時には、合掌し、お

念仏を唱えるのでありますが、合掌した手を、どこに持ってゆくかというところ、胸の所
に持ってゆきます。胸という所は大事な所とされています。胸に手をあてて、よく考
えなさいとか、大事なことは、胸にしまっておきなさいとか、いいます。そんなに高
くもっていったり、下に持ってゆかないで、お乳ちとお乳ちの間にもってゆきます。
そして、肩の力をぬきます。

その前に、坐り方があります。両手を前について、お尻を上げ、足の親指を重ね、
その上にそーっとお尻を下ろして、体をおこします。そうしますと、下腹に力はい
り、姿勢がよくなります。顎も自然にひくこととなります。

仏教では、お宗旨というものがありません。宗は、むね、旨も、むねであります。即
ち、大事なものを大事とするということです。私達の宗旨は、浄土宗と申しま
す。即ち、極楽浄土、きわめて楽しい清らかな国土を大事にするということです。即
ち、禪宗というと、禪を大事にするということです。日蓮宗というと、日蓮さ
んを大事にするということです。このように、いろいろのお宗旨がありますが、
目標とする所は成仏することであり、仏になることでもあります。これも私達が同
じ日本人であっても、顔がまったく同じという人がなく、双子でも親がみれば違いが
分かるというように、心もみな同じであっても、少しづつ異なるので同じ仏教でも、
受け取る人により、また説く人によって少しづつ変わるので、いろいろのお宗旨とい
うものが出来てくるのであります。私達は浄土宗でありますから南無阿弥陀仏と唱え

るのであります。南無とは帰命発願といって、どうぞと願うことばであり、阿弥陀とは無量寿無量光、即ちばかり知れない命、ばかり知れない光、ということ、いつでも、どこでもということであり、仏（ほとけ）とは、悩みや行止りがほどけたものと受け取ると受け取り易いと思います。そして、ブツというと、ブツダ即ちインドの言葉で、悟ったものということで、悟れば、悩みもほどけることとおもいます。即ち、「ばかり知れなく悟ったものよ、どうぞ」という言葉であります。

法然上人は、「南無阿弥陀仏というのは、家という言葉のようなものだ。家の中には、棟や梁やタルキもあれば柱もあり、一切の家具もある。みんな大事なものである。然し棟とか梁とかいう言葉の中には、その他のものはいっていない。南無阿弥陀仏の中には、一切の功德みな悉くこの名号の中におさめられている」と、申されています。

このたび昭和天皇が崩御あそばされましたが、その時、陛下の病氣平癒祈願が、全国的に行なわれましたが、これは、国民の陛下に対する尊敬と真情の現れであると思いますが、あの毎日何回となく放送されるテレビを見ていて、このたびの陛下の御病状が回復困難と殆どの方が思われたのではないかと、思うのであります。

何回となく行なわれる輸血そして下血、吐血とかいう報道を聴いていて、陛下はお氣の毒だと、思われたと思います。私はこの報道を聴いていて、陛下は、私達に、「もし自分のようになった場合、みんなの準備は出来ているかね」と、問いかけられ

るように思われたのであります。長生きすることは結構なことであります。この命というのは、二度とない、かけがえない命であります。このかけがえない命、尊とい命もいつかは終りを告げ、この世を去って行かなければならないのです。科学が進み、医術がすすんでも、今の所、永久にこの肉体そして命が、無くならないようにすることは、できないのであります。もし出来るようになって、この世の喜怒哀楽、苦しみ、つらさ等というものはついて廻るのであります。

法然上人のお言葉に、「宿業カギリアリテ、受クベカラン病ハ、イカナル諸々ノ仏、神ニ、イノルトモ、ソレニ、ヨルマジキ事也。祈ルニヨリテ、病モヤミ、命モ、ノブル事アラバ、タレカハ、一人トシテ、ヤミ、シヌル、人アラン。イハンヤ、又、仏ノ御力ハ、念仏ヲ信ズル者ヲバ転重軽受トイヒテ、宿業限リアリテオモク、ウクベキ、ヤマヒヲ、カロク、ウケサセ給フ」とあります。

いつかは、この世を去ってゆかなければならないのですが、その時はボックリゆきたいものです。しかし陛下でもあのように休まなければならないのです。このどうすることも出来ないことを、どうしたら明るく正しく仲良くうけることが出来るかというのが、宗教であらうと思うのであります。どうか休んでも心安らかに、それを受けとってゆきたいものであります。それがまたお念仏であり、苦しみから救われる為の願いが、お盆とお施餓鬼の行事であらうと思います。

《法 話》

お 盆 に 想 う



ほん近しひとりひとりの位牌ふく

お位牌をふきながら盆のお迎えの準備をする。ていねいにふいていると亡き人のことが思い出されてくる。

今は亡き人々との魂の交流がこうして始ま

り、つかの間の人世をふと考えたり、かえりゆく魂の世界のことを思ったりする。

都会に出た人は、故郷へ帰り、お墓参りをし、精霊棚に供物を供え、同時に、久方振りの故郷の人々との再会をよろこぶ。

こうした死者との交流、生者との交流を通

まさむらえいめい
正村瑛明

(東京・北区正受院住職)

して、人々は魂の回復、精神の回復を計り、再び、もとの生活に戻ってゆく。

そういう意味で、お盆の行事は、私たちに心の浄化を与えてくれている。

この世のことばかりにかまけていると、だんだん人間が濁ってくるような気がする。

今日、あまりにも自己中心の生活に慣れ切った日本人を世界の人々はエコノミックアニマルと呼んでいる、という。

こんな生き方をしていてよいのか。もっと違う生き方があるのではないのか。

四十代半ばにさしかかった私は、この頃、人間の業とか迷いというものをしきりに考えるようになった。

うどん供えて

母よ 私もいただきます

種田山頭火の句である。

種田家は山口県防府でも指折りの大地主で、山頭火はその跡取りとして明治15年に生れた。父竹次郎は、村役場の助役から政治に手を出し、家財を傾けてしまう。女くせが悪く、妾を二人も三人も囲っていたという。母親ふさは、33才の若さで井戸に身を投げて死んだ。山頭火の11才の時である。

それから時移り、妻と別れて流転放浪の旅先の山口県湯田風^{ふゆのき}来居で、山頭火は一人淋しく母の47回忌の読経をあげた。57才であった母の位牌を肌身離さず旅した彼は、その位牌の前に、干しうどんを供えた。

その時によんだのが先の句である。

この風来居を去り、広島の大山澄太師宅に寄り、宇品港より四国松山へわたるといふ朝、山頭火の風呂敷包の中から白い紙包がころげ落ちた。

いかにも大事そうにするので、大山師がたずねると、しばらく黙っていた山頭火はぼつりぼつりとこんなふうに語った。

「これはお母さんの位牌なんだよ。君には今まで言うていなかったが、ぼくが十一の時に、この母は、おやじの道楽を苦にして、おやじが妾を連れて別府へ遊山に行ったその日、井戸へ飛び込んで自殺したんだ。母屋がさわがしいで、ぼくは遊んどったのをパアッと走って行ったら、母は紫の顔色になって土間へ引き上げられていた。そした

ら親戚の者が来て、子供はあちらへ行けと引きはなされた。それが母の最後だった。

こういうわけで、ぼくが坊主になったのもあのままでは母は成仏できていないと思うからだ。ぼくがだめな人間だからこんな乞食坊主になったけれども、ひとつは母の冥福を祈りたいという気持ちがあったんだよ。で、君は見てくれたかも知れんが、庵に住むときには、これと観音さまをまつとったんだ。米がないときには、母の命日に、三月六日だが、干しうどんを三すじでもあつたら炊いて供えたんだ」

山頭火は、はじめて涙を流して話した。これを聞いた者はみんな泣いた、という。

さびしさのきはみにたへてあめつちに

よするいのちをしみじみと思ふ

——伊藤左千夫——

人間は、一度さびしさの極みに、悲しみの底に落ちてみないと、しみじみとした愛情や人を信ずるということの意味がわからないのかも知れない。

アテイナシヌワラビ
あてなしのわらべ
道迷て泣かば
オシマチタバウレ
おし戻ちたばうれ
阿弥陀仏

近代歌謡成立に大きな影響を与えた琉球短歌、琉歌は三味線に合わせて歌われる。これは死別の悲しみの歌、散山節である。

西も東も分らない幼な子が、あの世で道

に迷って泣いていたら、どうかもう一度、この世の私たちのところへ押し戻して下さい、やさしい阿弥陀さまよ。

子に先立たれた親の心情が切々と伝わってよむ者の心をゆさぶる。

先立ちし我が娘陽子の今年は十七回目のお盆を迎える。もし可能ならば、いつかこの散山節を聴かせてもらいたいと思っている。そして、わんわんと泣きたいと思っている。

その娘陽子の位牌を胸に四国八十八ヶ所をお参りさせて頂いたのは、もう八年も前のこととなる。

一番から打ちはじめて最初の難所といわれるところは、十二番焼山寺への16キロの道である。

途中、長戸庵・柳水庵・一本杉庵を登り下

りしながら、大変きつい山越えとなった。

最後の休憩地、一本杉庵をあとに、小石のごろごろとした山道を下り、山村の民家の点する里に出ると、あとは一気にきびしい登り道となった。

心肺に手足をつけて、あえぎあえぎ登ってゆくといったらよいであろうか。胸つき八丁の急勾配を登りつめる頃には、もう、ただの生命体がい上がってゆくといった状態で、お金とか、名前とか、学歴とか、そんなものがすべて吹きとんでしまった。ただ、細胞のひとつひとつが満身の力を出し切って自分を支えてくれているという実感だけである。

肩にくい込むおもしろい荷を背負いながら、ようやく登りつめると、焼山寺の伽藍が樹間に見えはじめた。

ふと、道端の木にぶら下がっている『道しるべ』を見ると、『よくお詣り下さいましたね』と書いてあった。

その文字を見るときもなしに見ているうちに、何か名状しがたい万感の思いが、私の生命の奥底からこみあげてきた。

すまぬとも、ありがたいとも、勿体ないとも、何ともいえぬ感情が涙となり、つづいて声となって、誰もいないのを幸いに、ワァーワァーと泣いた。木にもたれ、大地に伏して泣きつづけた。

どれほど泣いていたのか、泣くだけ泣くと、もう、それでよかった。

自然と一切に合掌して、ナムアミダブツ、ナムアミダブツとお念仏が口からでていた。随分、忘れていた涙を流したように感じ

た。長年の心の垢がこの涙で洗い浄められたのであろうか。心なしか荷が軽く、目の世界が明かるくあたたく感じられ、不思議な安らかさに包まれていた。

その安らかさの中で、位牌となつて姿をかえた娘が静かにほほ笑んでいるように思つた。そして、何か人を愛してゆけそうな、信じてゆけそうな気がした。

旅というものは人を清浄にしてゆくからこそ意味がある。旅というものは人を深めてゆくからこそ価値がある。

人生がその道中であり、私たちがそれぞれの道をゆく旅人であるならば、時に立ちどまって自らに問いかけてみよう。

少しでも清められているのだろうか。深め

られているのだろうか。

そして、この世の旅を終えた人々に語りかけたい。

悲しみやさびしさが、怨みや憎しみに向うのではなく、安らぎやいたわりの世界へと転換できますようお力を下さい。

最後に、すべてにこえておやさしい阿弥陀如来さま、お見捨てなくお救い下さい。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

お盆を迎えて、お位牌を清めながら思ひつくまきに述べさせて頂きました。

御慈光裡、お念仏の中に暑い夏をおしのぎ下さいますように。

合掌

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十五巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

法 話

お盆とお施餓鬼法要に因んで (上)

金 かね 子 こ 寛 かん 哉 さい

(大正大学講師)

(一) 盆施餓鬼の想い出

一年中でお寺にとって一番多忙なのはお盆行事のある八月(東京では七月)ではないかと思う。一般家庭においても八月は学校が夏休みに入り、その他の月の生活とは異なるリズムで展開して行く。

都会で生活をする人の中、何割かは地方へ出かけ、都会と地方の人口のバランスも一時的に変化する程、その生活のリズムは大きく変わる。そのピークが八月のお盆の頃であることは今更言う迄もない。お寺のお盆行事はそのような一般家庭における日常生活の大きな変化の中で、しかも暑い最中に行なわれるのである。そこには普段と異なる特異な雰囲気

気がかもし出されていることは誰しも認める所である。それだけにその行事に出逢った人々が受ける印象もまた格別のものとなる。

最近はかわったかもしれないが、筆者の学生時代には、東京で七月のお盆をすませ、郷里の青森で八月のお盆をつとめ、その後更にまた旧暦（陰暦）の八月のお盆（漁業を中心とする海岸の一部の村）をつとめるといふように、一年に三回お盆行事をつとめた経験がある。

このように三度もお盆行事をつとめると、暑さも手伝ってさすがにくたびれる。長いはずの夏休みもその準備と行事そのものに時間をとられ、殆んど無くなってしまう。

中でも困ったのは陰暦の八月のお盆である。陰暦には四年に一度位閏年がある為、四年ごとに完全に一と月程日程がスライドしてしま

い、予定が立てにくいのである。閏年に当たるとお盆行事は陽暦の九月に入ることもあるので、夏の間中お盆をつとめているような感じになることもあった。

しかし、その反面、今から思うと大変さの中にも楽しみもあったように思う。普通は一度で済んでしまうお盆行事が、徐々に行なわれ、多忙ではあっても沢山のお檀家の人や知人と接し、話す機会に恵まれるからである。

このようなお盆行事の中でも一番中心になるのは八月十六日の「お盆とお施餓鬼の法要」である。一昨年逝った師匠から、お盆の近くになると『孟蘭盆施餓鬼合本』と表紙に書かれた筆写本を渡され、普段のお経文とは異なる独特な抑揚と節廻しのお経を練習させられたのである。その経文は難しい漢字ばか

りで読みにくかった為、一々ふり仮名をつけて覚えた。中でも引鑿、鐃、鉞、太鼓を打つ時の数が覚えられなくて閉口した。二、四、四、三、三、四、四、二、二、四、四、一、とその打つ数を丸暗記して打つたことを思い出す。そのせいか、この数だけは未だに忘れない。

八月十六日の法要には、普段はお寺から遠く離れている為、減多にお参りに来ない他村の人々も、この日だけはわざわざ出かけて来る。お檀家の人がこのように遠方からまでわざわざ出かけて来るのは師匠の寺ではこの日と御忌会(正月二十四日夜から二十五日)の年に二回だけであった。その他は特別の行事でもない限り、お寺は極めて静かである。ただ後年はユース・ホステルを始め、夏の間は都会か

ら来る若者の旅行者でにぎやかになり、それは今でも続いているということである。

このようにして過ごしていた時期にはお盆とお施餓鬼の法要が別々の由来を持つ法要であるとは全く気付かなかった。お施餓鬼の法要がお盆の行事と切り離して行なわれているのを知ったのは、やはり東京へ出てからのことである。

田舎の師匠の寺は、海岸線の小さな町にあった為か、私の知る限りでは盆施餓鬼の法要の時等も、近隣のお寺と互いに随喜(手伝)し合うと言うようなことはなかった。隣寺とは言っても汽車で行かなければならず、その頃は道路も悪く、車も今日程普及していなかった為、互いに往復するのは大変だったのではなからうか。法要は師匠を中心に寺内の者が

私のような小僧も含めてせいぜい四、五名でつとめるのが普通であった。それだけに、私にとっては寺内の行事が見聞することの全てであって、他の形式のあることを見聞する機会も、また考える必要もなかった訳である。

(二) お盆とお施餓鬼

本来性格の異なる二つの法要が、仏教行事の長い歴史の中で「盆施餓鬼」という一つのスタイルを形成して来たことにはそれなりの理由があったように思われる。その理由の一つとして考えられるのは、かつての農村地帯では繁忙な農作業に追われ、その一段落するのが八月十六日前後にあたるということであらう。農作業の忙しい間はお寺参りも、親

戚付き合いもなかなか出来ない為、お盆行事中だけは互いに在宅し、お寺参りもして往来が行なわれた。それに合わせて、お寺の行事も形成されて来たように思われる。

この事は前にものべた三回のお盆と共に養蚕の盛んな地域には「カイコ盆」と称して七月三十日から八月一日頃にかけてお盆行事を営む地域のあることから考えられる。

このように見えて来ると、お盆行事の中心が『孟蘭盆経』に説く僧自恣そうじしの日（陰暦七月十五日）を基盤としながらも、人々の生活のリズムに合わせて形成されて来たことが理解され、またそのようにして形成されたお盆行事を中心に、その地域の人々の生活をリードして行く働きを持つようになった面もあったように思われる。

お盆の行事とお施餓鬼の法要が別のものであることは、お盆が時期的に一定しているのに対して、お施餓鬼は「盆施餓鬼」を筆頭に「川施餓鬼」、「十夜施餓鬼」など、他の行事に付随して行なわれる点からもその法要の時期が一定していないことが推測出来る。

お盆の行事が『仏説孟蘭盆経』に由来し、その中心が目連尊者と亡き母との間にかわされた孝養物語が中心となっている事は既に広く知られており、今ここでそれを述べるつもりはない。ここではお盆行事が行なわれる動機となった、目連尊者について述べ、そのことを通してお盆行事の意義を考えてみたいと思う。

(三) 舍利弗と目連

目連尊者はインドの言葉で、マハーマウドガリヤーヤナといい、中国では摩訶目犍連、大目犍連と訳し、略して目連と呼ばれるようになった。インドのマガダ国コーリタ村でバラモンの子として生まれた。初め六師外道の一人、懷疑論者であるサンジャヤの弟子となり、舍利弗(シャリブトラ)と共に良く教学に精通していた。当時弟子を百人程従えていてかなりの勢力を持っていたことが推測出来る。しかし、そのような地位にあっても、サンジャヤの教えは究極のものでないことに気がつき、精神的な安住の境地は得ていなかった。このようなことから、サンジャヤ門下の親友

舍利弗と共に次のような約束を交していた。

「二人の中どちらかで先に悟りを得たら、必らずそれを互いに知らせ、共に悟りの境地に到達しよう」と。このような約束の基に、良きライバルとして修行し、精進を重ねていた。

そのような或る日、舍利弗が王舎城に到り、釈尊の最初の弟子である五比丘の一人、馬勝に会い、その立居振舞いの端正な様子を見て、その理由を尋ねた所、馬勝の語によって初めて仏陀の出現を知り、「諸法は縁に従って生じ、諸法は縁に従って滅し」という一偈の法門によって、忽ちに悟りを開くことが出来た。舍利弗はこのことを直ちに約束通り目連に告げ、共にサンジャヤの教団から、仏陀のもとに転向することとなった。また自らが転向したのみでなく、舍利弗・目連二尊者のも

とにいたサンジャヤの弟子二五〇人も共に集団転向したといわれる。

目連は釈尊の弟子となって七日間（ひと月ともいう）の修行によって阿羅漢果という、小乗仏教の教えの中では最高の悟りに到達し、釈尊の十大弟子の中では神通力に通ずる点では第一であるといわれるようになった。バラモン僧時代からの無二の親友であった智慧第一の舍利弗と共に、釈尊の双肩といわれる程になり、釈尊教団の維持発展に尽した功績は大きい。『大智度論』四十には「舍利弗は右面の弟子であり、目連は左面の弟子である」と記し、その徳をたたえている。

この両者に関わる記事は仏教經典中に数多く見られる。それらの経説を検討すると、舍利弗は教団内部の比丘たちに対する影響が強

く、かなり高度な仏教教義を釈尊に代って説き明し、目連は教団の外部、即ち在家の信者に対する教化の面で勝れていたといわれる。

舍利弗と目連が釈尊の両面の弟子であるという説が出て来るのもこのような要因にもと付いているのではなからうか。

中でも、目連の在家信者の教化について見ると、当初は現世の人との関わりが中心であったものと思われるが、後には目連の神通力第一ということから、六道の遊歴、特に餓鬼界、天上界などとの関連が多く見られ、在家信者の死後にまで関連して説かれるようになってくる。

目連が神通力によって、亡き母を餓鬼の境界から救済するという『盂蘭盆経』の説は、それのみだけ見ていると釈尊の一弟子が個人

的な親孝行をした単なる孝養譚としか見られない。しかし、經典中には今見たように、目連尊者の在家信者中心の教化という役割が背景にあったのであって、そのような中で神通力による亡母救済という経説を考えて見る必要がある。このように經典全体の流れとして見る時、その中で目連のになった役割が在家信者の教化という点にあったとすれば、そのことは後世『盂蘭盆経』の流布の上に於ても少なからぬ影響を及ぼしたものと考えて良いのではなからうか。

浄土三部経の一つである『観無量寿経』には阿闍世の為に牢獄に幽閉された頻婆娑羅王が釈尊に請うて目連の教えを受けたことを次のように記している。

『江戸物語』

細田隆善（豊明）著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

● 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録

● 定価一八〇〇円【付】名所史跡・資料館案内】

△発行・発売△

ノンプル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇二
電話（〇三）二六九―一二九三 二六七―六六三七
振替（東京）七―一〇九三／千一六二

合掌恭敬して者、嶋闍山に向つて遙かに世尊を礼して是の言を作さく、大目犍連は是れ吾が親友なり、願くは慈悲を興して我れに八戒を授けしめたまえ、時に目犍連鷹隼のが如く飛ぶにして疾く王の所に至る、日々是の如く王に八戒を授く、

と。この中には目連の在家信者教化の役割が

良く示されている。浄土教と『盂蘭盆経』との係わりもこのような所から布衍されて行ったのではなからうか。三部経中にはあまり多くはないが、他にも目連の記事が見られる。舍利弗と目連は悟りを得たのも相前後していたが、その入滅も舍利弗が先で目連がその二週間後であったと伝えられる。（つづく）

○『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』八月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20 cm × 30 cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30 cm × 50 cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八―二―八七

谷口 潮 原作

短篇小説 「みかえり阿弥陀」 紹介

——『辺境』九号（冬号一九八九・二月）所載——

高名な小説家井上光晴氏編集の季刊誌『辺境』は、特異な文芸誌として読者も多い。その九号（冬号一九八九・二月、記録社発行）に、『浄土』誌の愛読者でもある作家の谷口潮さんが表題のような短篇小説を載せられている。浄土信仰を日々の生活の糧として生きておられる谷口さんの宗教観、人生観がこめられた一篇であるが、こうした作品が書かれている

ことを少しく紹介して、出版文化の荒波の中での一雑誌をまずは手にとってみたい。あわせて第一小説集、第二小説集に続く谷口さんのさらなる活躍を期したいとともに、また念仏信仰を一層深められんことを願うのである。表題の「みかえり阿弥陀」とは、京都東山永観堂禅林寺のご本尊阿弥陀如来のことである。

——永保二年二月十五日朝、永観律師という人が道場で念仏し、行道していると、本尊の阿弥陀如来が壇上より降り立って律師を先導するように歩みだした。永観律師が驚き、感動して思わず歩みをとめると、阿弥陀如来は左を振り返り、「永観遅し」と声をかけた——

という有名な故事に由来する阿弥陀立像である。

この小説の主人公“私”は作者その人の姿を映しているのであるが、「ガン性の病い」を得て、病院にある“私”が、「阿弥陀如来よ。あなたは一体、だれを見返り、何を言おうとされているのか、教えてほしい」という問いかけを発するところに主題を置いている。「永観遅し」と声をかけた大慈大悲の阿弥陀

如来の姿を、“私”は現実の病院における同室の患者Kさんとその奥さんとの交流の中から、淡い思いとして感じ取るというのが、一口でいえば、この短篇小説の梗概である。しかし、小説冒頭に引用された

——時到れば華は自ら散り

願いに随いて華は還を開く——

(晨朝礼讃偈)

という言葉にもこめられているように、実は病い重く死んで行ったKさんと、これを看取った奥さんとのそこはかとなき交渉を、“私”が静かに思い返すことによって、この小さくしてまた限りなく尊い人間の無量のいのちを、阿弥陀如来の無量のひかりの中で、少しく振り返って摂め取ってしまった小説である。

(勝崎裕彦)

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(15)—

木 下 隆 一
きの した りゅう いち

昭和二十四年の梅雨は陽性で、大降りしたかと思うと、幾日も梅雨晴れの日が続いた。そして、真夏を思わせる陽光が燦々と降り注ぎ、一切の物を温気の中に閉じこめたが、山の緑は一層色濃さを増し、世はまさに万緑の候であった。

私が「万緑」という季語を歳時記の中に見出し、中村草田男の「万緑の中や吾子の齒生え初むる」の句を知ったのは、この年であった。「万緑」の出典が、中国北宋の宰相で、文章家であった王安石(一〇二一—一〇八六)の「石榴詩」の一節、

万緑叢中紅一点

動人春色不須多

(万緑叢中に紅一点あり。人を動かす春色は須らく多かるべからず。)であることはよく知られてい

るが、これが俳句の季語に採り入れられたのは、そう古いことではない。前出の草田男の句を以て嚆矢とすというから、昭和も十年代のことであろう。

中村草田男といえば、「降る雪や明治は遠くなりけり」の句が、何かにつけて引き合いに出されて有名であるが、紅一点の石榴の花を引き立たせる役目を負った万緑を発見し、季語として定着させたことによって、後世に名を残す俳人となった。生命力の象徴である緑と、嬰兒の乳歯の白との清々しい対比が世人の共感と呼んだのであるが、当時十七歳の少年だった私は、むしろ石田波郷の「万緑を顧るべし山毛櫨^{まもろ}峠」の明るさに心引かれた記憶が残っている。

ハチを探しに、尾島が言った山道に虎徹を連れて分け入ったのは、そんな梅雨晴れの日
の午後であつた。雨が上がつて三日目のことで、墓地へのぼる山陰の道はぬかるんで滑り易かつたが、豪雨の名残はそれだけで、坊主頭に照りつける日射しは暑く、妙正寺の山門に辿り着いた時は、すでに全身汗だくだった。チビのくせに、虎徹の鎖を引く力は相当なもので、制御するのに余計な汗をかかなければならなかった。地面には虎徹の氣を引く物があまりにも多過ぎた。さすがに大きな黒蟻だけは、幼かった時鼻を押しつけて蟻酸にやられたのに懲りたらしく、見向きもしなかったが、小ささまざまな甲虫類には興味を示した。中でも黄金虫が好みのようだったが、それにも増して、墓石の隙間をチョロチョロ出入りする蜥蜴は珍しかったのか、見つけると好奇心丸出しで吠え立てて、その場を離れさせるのに苦労した。犬は色盲で、色の識別はできないとされているが、どちらかというと

大型の褐色のものより、銀色で黄や青色で彩られた小型の蜥蜴を執拗に追いかけたから、ある程度、犬は色を識別する能力があるのではないかと私は思う。

ま、それはともかくとして、不断なら通り抜けるのに一分もかからない墓地の道に、五分も十分もかけるのだから、連れているこちらにはたまったものではない。やっとの思いで引きずって来て山門の庇の陰にたたずむと、海から吹き上げる風が心地良かった。市街地の上を越えて来たのだから、必ずしも涼しい風とは言えなかったが……。海も島も薄い霧がかかったように見えるのは、温気のなせる業なのであろう。島と陸地に囲まれた海は、潮の流れの速さなどおくびにも出さず、穏やかな顔を見せている。もともと、この海面が波立つことは年に数えるほどしかなく、絵に描いた潮のような景色の中に浮かぶ無人の小佐木島の前を、石炭運搬の舢舨が二十数艘連なってタグボートに曳かれて進んでいるが、タグボートが空にまき散らす黒煙の量とは裏腹に船脚は遅く、長い船列は殆ど動いているようには見えない。筑豊の石炭を阪神の工業地帯へ運んで行くのであるが、一体何日かけて、若松あたりの港からここまでやって来たのであろうか。そう思うと、国体に出場するため、先年の十月、数日間逗留した若松の港の喧騒が、懐かしい思い出として脳裏に甦って来た。だが、それも甚だ断片的で、その一つ一つに関連はなく、遠い昔の思い出に似て茫としたものであった。

虎徹は私の足許に腹這い、長い舌を出してハッハッと荒い息づかいをしていた。

「馬鹿力出して引っ張るからだ。苦しいのはお前なんだぞ。少しは加減することを覚えた

らどうだ」

鎖でこすれて赤くなった掌で、背中を撫でてやると、虎徹は喘ぎを止め、〈放してよ〉と言いたげな目で、私を見上げた。当時はいまほど法律がうるさくなかったから、犬を一々鎖で縛る必要もなかったのであるが、虎徹は一度鎖を離れてしまおうとかなかなか捕まらず手を焼くことになるので、どんなに愛くるしい目で見られても、放してやる訳にはいかなかった。私が鎖を持っていなければじゃれつくくせに、手に鎖があると、決して私の手の届く範囲内には近づいて来なかった。ポケットに鎖をしのばせて寄って来るのを待ち受ける手段も試してみたが、ちよつとでも鎖の音がすると、警戒して、捕まるか捕まらないかのぎりぎりの線で私の出方をうかがうようになり、しまいには鎖の匂いがただだけで、私の呼びかけを無視するようになってしまった。自由でいたい気持ちは分からないでもなかったが、以後虎徹は外出の際はいかなる時も、虜囚の身に甘んじなければならなくなってしまった。

神社の手水を手で掬って虎徹に飲ませると、私は鎖を取り直して山道に踏みこんだ。右手は妙正寺の寺域で、左手は蜜柑畠になっていて、葉裏に小さな青い実をのぞかせていた。寺域の北西部の奥まったところに、白い土塀に囲まれた墓所があり、代々の三原城主の五輪塔が並んでいたが、お世辞にも手入れが行き届いているとは言えなかった。その上の城主の菩提弔ひし

古刹の塀は崩れてありし

という、私の下手な短歌で察しがつくと思うが、そのころの妙正寺は荒れ寺であった。

国に献納したのか鐘楼に梵鐘はなく、山門の扉は破れ、境内は掘り返されて、冬は大根畠となり、夏は甘藷の蔓が地面を這っていた。世が世であれば、小さいながらも城主の菩提寺としての風格を保っていたのであろうに、敗戦という未曾有の出来事によって、古い権威が失墜したのと同時に、それまで庶民の魂の寄り所となっていた神社仏閣は、全く顧られなくなってしまったのである。この見捨てられた感じの立派な五輪塔に、私は兼好法師が説いた無常感を感じずにはいられなかった。道は通る人がないせいか勝手気儘に生い茂っていて歩きにくく、草いきれが激しかった。強靱な蔓草に足を取られて、何度も前につんのめった。特に棘を持った山帰来には悩まされた。虎徹も二の足を踏んでは、私を振り返った。どれほど進まないうちに、早々に、私はハチを探すのを諦めた。汗の匂いを嗅ぎつけて蛸たこが集まって来たし、そうこうしているうちに、蛇あままでやって来たのである。蛇はなんとか追っ払ったが、蛸には首筋を二つ三つ刺されて、大きく脹れあがった。

神社の手水で首筋を冷やしながら、私はぼやいた。

「虎徹、お前はいいなあ。毛に覆われているから、蛸にやられなくて……。これじゃあ、山の中へなんぞ行けやしない。もう、親父を探しに行くのはやめにしような」

この年の秋の終わり、私は偶然思いがけないところでハチに出会った。友人の家で開かれた句会からの帰り道、不断あまり通らない道を辿っていると、暗い街灯の下に、ポツン

と犬が立っているのが見えた。まさか、それがハチだとは思ひもしなかった。そこがハチのテリトリーではない場所だったからである。しかし、近づいてみると、それはまぎれもないハチであつた。

「ハチ！ お前生きていたのか」

と言うと、ハチは私の方に顔を向けたが、シヨボシヨボした目に、果たして私の姿が映つていたかどうか。ハチは老いさらばえていた。春宵の月に吠えて、刑事を走らせたところの雄姿はどこにもなく、暗い灯の下でもはっきり分かるほど毛の色に艶がなく、それも他の犬に噛まれたのか、ところどころ剥げていた。そして顔は一層白っぽくなって、高砂の翁の面を見る思ひだった。

「ハチ！ よく生きてたなあ」

かがみこんで首を抱くと、ハチは僅かに甘える仕種を見せたが、腕の中から首を抜いてしゃんと立て直すと、私を振り返ることもなく、ゆっくりと坂道を降りて行つた。

「ハチ！ どこへ行くんだ、帰つて来い！」

無駄と知りつつも、私は声をかけずにはいられなかった。そして涙した。古武士然と去つて行くハチが哀れでならなかったのである。涙にぼやけたハチの姿が、ふっと見えなくなった。横道にでも外れたのか、忽然とハチの姿は闇に消えた。呆然と立ち尽くした私は、しばらく動くことが出来なかった。

ハチと私の永遠の別離であつた。

◇ ◇ ◇ 新刊紹介 ◇ ◇ ◇

安居香山 著

緯書と中国の神秘思想

漢代思想と緯書、道教と緯書、
緯書の成立とその種類、
神秘思想と科学などを易しく説く。

◇ ◇ A5判・三〇〇頁・定価二〇〇〇円 ◇ ◇

《発行・発売》

平 河 出 版 社

〒一〇二 東京都千代田区隼町三一二

TEL(〇三)二六三一四八八五 振替(東京)一一一七三二四

緯書は迷信でもなければ、異端の書でもない。

れっきとした儒教の思想の流れである。

それは、漢代の時代思想を代表し、それ以後の中国思想にも深く根をおろしているのである。

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん} 弘^ぐ の 生涯 (八)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ} 浦^{うら} 行^{ぎょう} 真^{しん}

従 軍

岩井智海が「仏教音楽論」を法蔵館から出

版する少し前ころから、日本と清国(いまの中国)の間に、朝鮮半島をはさんでキナ臭い煙が立っていた。

もっともこうなるには、複雑な背景があっ

た。

もともと朝鮮は、日清両国にとって国防上、無関心ではいられない地理的位置にあった。

清が朝鮮で軍事的優位にたてば、日本は直接その脅威にさらされるし、逆に日本が優位にたてば、清国も安閑としてはいられない、といった関係なのである。

——国家には主権線と利益線がある。

とは、当時の参謀本部長だった山県有朋の持論で、主権線とはいうまでもなく国境のこと、利益線とはその主権線の安全と深くかわった地域を意味するのだが、これで説明すると、つまり朝鮮は日清双方の利益線のダブった輪のなかにあったわけである。

そうした事情のもと、明治初年いらい、清国は朝鮮を「わが属国」と主張して事あるごとに部隊を進駐させ、日本もそれに応じて出兵するというぐあいで、いざこざがたえな

った。

この小競りあい^{ミキマキ}は明治十八年に、日清双方が朝鮮に兵をおかず、もし出兵の必要あるときは通告しあい、必要がなくなれば兵を引く、という天津条約が結ばれていらい、小康を保っていた。

とはいえ日清の衝突は、朝鮮国の内政が整い、完全な独立をみないことには、避けられない性質のものだった。しかもその二つは、当時の朝鮮国の現状からは、とうてい期待できないことにぞくした。

小康が破れた直接のきっかけは、朝鮮半島の南西地方にあたる全羅道の農民が、地方役人の税金横領や増税に反対して起こした一揆^{イキ}からはじまった。その指導者が「東学」とよぶ全国的な新宗教運動の徒であったところからたちまち広がり、いわゆる「東学党の乱」へと発展していった。

それだけならまだしも、時の朝鮮政府が乱の鎮圧を、清国の袁世凱（袁世凱）に依頼したことから急に雲ゆきが怪しくなった。清はこれをきっかけにいっきに朝鮮を支配下におさめるべく、待っていたようにして出兵を快諾した。日本にとって、これが脅威でないはずがない。“清国出兵”の至急報が、杉浦駐朝鮮代理公使から入ったのが六月二日。時の総理・伊藤博文はその急電を臨時閣議の席で受け取り、その場で出兵を閣議決定した。

なんとも素早いことだが、じつは先にも記したとおり、日本はこのことを予想して、明治十六年ころから戦争を覚悟し、準備を始めていたのである。

その中心となったのが、山県だった。陸軍の倍增を強力に推進し、海軍もまたそれにならって、当初、二十五隻二万七千トンだったのを、八年で四十二隻程度にする計画を立て

て、国民生活の耐乏と引替えに、しやにむに実行したのだった。国民もまた近代国家への脱皮のために、それに耐えた。

それはさておき、伊藤はどちらかというと慎重な政治家で、はやる周囲を押さえにかかるといふ人物だったのだが、代理公使からの急電を一読するなり、秀吉いらの外征であるこの戦争を決断したのは、すでに外相の陸奥宗光を通じ、陸軍の川上操六参謀本部次長、また海軍の西郷従道海軍大臣からも、“勝利に成算あり”という報告をうけていたからであった。

日清戦争を日本の侵略戦争とする見方は、太平洋戦争後、根強くある。

歌でもうたうようにそれさえ言っておればすべてが片づくなら簡単だが、じっさいは果たしてどうだったろうか。

世界はまだ、帝国主義のまっ只中であつた。いまわしい言葉だが、戦争は現代とちがつて、目先のことにしろ「勝てばもうかるビジネス」だったのである。だからこそ英国をはじめドイツもフランスもロシアも、熱い視線を東洋にそそいでいた。

なかでもロシアが最も熱心だった。クリミア戦争に敗北したこの国は、銚先を東洋に転じ、東洋に侵出する準備としてすでに明治二十四年（一八九一）、シベリア鉄道の建設に着工していた。彼らに、日本はまだあまり眼中になかった。ロシアの第一の目標は清国だった。うまくゆけば彼らは、建国いらいの悲願である不凍港を、清国から奪う目論見だった。すでに七つの海を支配下においていたイギリスも、なかなか狡猾だった。当時は植民地だったインドの綿花を、自分は手を下さずに日本に朝鮮へ売らせて利益をあげ、日本は

日本でそれから得た利益で安い朝鮮米を買い占めて、内地へどしどし運びこんでいた。イギリスはロシアの南下阻止を重要な政策の一つにあげ、その盾として、日本に肩入れしていたのである。

米の大量な買い上げが朝鮮の大衆を困窮におとし入れ、それが朝鮮をいつ爆発するか知れない火薬庫にしているなどといった認識は、みじんもなかった。「後進国を富ませることが自国の豊さに通ずる」というグローバルな経済観は現代のものであつて、当時はそこまで考えるほど世界は——力のある国もない国もひっそるめて——まだ、成熟していなかったのである。

そうしたなかでの日清戦争なのであつた。されば開戦は、やむを得ない選択だったと評していいのではないか。昭和に入つての、満州事変や日中戦争とは、まず基本的に、動機

も環境も違っていた。

山県は国家には主権線と利益線があることを、国防の基礎においていたが、自由民権運動の指導者として知られる大井憲太郎もまた「朝鮮は日本の堤防であり、この堤防が決壊すると、日本はどんな災いをうけるかもしれない」と語っていた。そしてこれが、当時の平均的な見方だったとされている。つまり国民はこの戦争を、

——弱い朝鮮をいじめて横暴をきわめる清国をこらしめ、朝鮮をたすける義戦。

ととらえていたのである。

のちの日露戦争では反戦の立場にたったクリスチャンの内村鑑三も「日清戦争の義」なる題の一文を英語で草し、これは「欲の戦争」ではなく「正義の戦争」であることを世界に訴えたほどであった。

仏教界の日清戦争観も、おおむねこれらに沿ったものだった。つまりは清国の行為なるもの、『大無量寿経』の説く、「国豊民安兵戈無用」（しやうとくくわんにんむしやういじやう）に反しているというわけであった。

しかしながら、戦争ほど仏教者にとって厄介なものはない。

不殺生戒は僧はむろん、沙弥も守らねばならないとされる十戒のトップにあるものだが、明治以後の国家、社会も、だからといって僧をノホホンと戦争から超然とさせておくほど、ゆとりのあるものではなくなっている。いや、仮りにゆとりがあったとしてそれが認めたら、それこそ徴兵のがれの出家がふえて、収拾がつかなくなるだろう。結局は「僧侶の世俗化」というリスクを承知のうえで、国民皆兵のルールにしたがい、国の命ずるままに戦場におもむくより選択はなくなっていた。

そうした直接参加だけでなく、仏教界は戦争遂行に、どんな役割を果たすべきかという問題も、一方にあった。

真宗はいち早く、中世末らしい主唱する「王法為本」^(金)説を掲げて協力をうちだしたが、その他の宗もまた同じ道を選択し、時代に即応する態勢をとった。その底には明治の初年、「神仏分離」が「廃仏毀釈」という名の怪物を荒れ狂わせた、あの国家権力の無謀ぶりへの追憶が、顕在もしくは潜在したことは否めない。彼らの意識のどこかには、「護法」と「協力」が同意語的に混在していたはずである。もちろん根本的に跳躍台となったのは、日清戦争を「義戦」とする世論であったことは、いうまでもないけれど。

智海のぞくする浄土宗では宗会が開かれ、献金や慰問品を集めて出征兵士たちを慰問す

るための部署・賑恤部^{しんじゆぶ}の創設と、外征軍慰問使の派遣が決議された。

当時の管長（現在の門主）は、知恩院第七十七世の日野靈瑞門跡であったが、この管長は七十七歳という高齢に加えて病弱だったにもかかわらず、開戦の報をきくと老軀に鞭うって内地の各師団をめぐり、兵士たちをみずから巡錫^{じゆんしやく}してまわった。法を思えばこそ、不惜身命であつたらう。

このとき外征軍慰問使に選ばれたのが、正使の荻原雲台、副使の岩井智海であった。

荻原は東京浅草の檀林・誓願寺の住職で、「漢詩をよくし、和歌を好み、なかなしく能書をもって知られた徳僧」と伝えられる人物である。この外征軍慰問から帰国したのち、浄土宗学本校の校長となったのでも察しられるように、子弟の育英にも関心のあった和尚で、梵語学^{ぼんご}の世界的権威として知られる荻原

雲来博士がその高弟だったといえ、うなずかれる人も多いだろう。正使を拝命したとき、数えの六十七歳であった。

福知山の法鷲寺ほうじゅうじにあった智海は、開戦後まもなく檀家の有志とはかり、出征兵士の歓送を盛んにするためのプラスチックバンドを編成して、壮行に花をそえたりしていた。

その隊員のユニフォームというのが、またモダンなものであったらしい。嵐演劇の『法鷲寺物語』によると、当時の日本陸軍の制服のなかでも一ばん「カッコいい」とされた騎兵隊の、肋骨模様の服を模したデザインなのである。練習場はさるころの離れだったそうで、そこで稽古を積んで歓送式に出向き、例の粋なユニフォームを着用におよんでプラスチックバンドやるのだから、これは目立ったであろう。地方では、プラスチックバンドそのものが、まだ珍しい時期ではなかったろうか。

むろんその指導はすべて、東京音楽学校出身の岩井智海その人である。嵐によれば、岩井は兵庫県氷上郡竹田村にでかけたとき、たまたまその小学校のトラのコのオルガンが故障と聞いて、

「それはじゃな——」

などといいながら、すっかり解体修理して元どおりに直してしまったという逸話の持ち主だから、プラスチックバンドの編成くらいは、楽にやってのけられたにちがいない。これは彼の、知られざる一面であろう。

そんな福知山ぐらしのなかにとびこんできたのが、外征軍慰問副使の任命であった。おそらく宗務所（現在の宗務庁）に、彼の口演のさわやかさと行動力を知る人がいて、その推挙があったことだろう。ときに三十二歳、知恵も力もある頼もしい青年僧だったにちがいない。

荻原と智海は明治二十七年十一月二十三日、宗からの慰問品である、家康が奇跡を得たことに始まる増上寺黒本尊の守り札、万能薬・宝丹、報恩教話を集めた小冊子各五万点を携えて、宇品から軍用船・広島丸に乗船した。ここから慰問従軍が始まるのだが、この従軍行について、智海は二つの資料を残している。

一つは、「日清戦役外征軍慰問通信文」(『鈴泉遺芳』では「日清戦争従軍記抄」と改題)と題する日記で、乗船の日から翌二十八年二月十六日、清国領内の海域で桂太郎第三師団長に随行し観戦するまでが綴られている。

もう一つは、帰国直後の六月十日に東京芝の弥生館でおこなった「従軍実況の所感」と題する報告演説の速記だが、こっちは日を追った叙述にはなっていない。事柄を、「はじ

めての経験で将兵が苦しんだ大陸の気候」「戦地病院の有様」「兵士の忠勇と孝心」「本国民の熱心な恤兵品と兵気の関係」「戦没者法会と兵士の義務」「宗教心と兵気」「兵の気概」「戦後持たねばならぬ覚悟」というふうに八つに分類し、彼自身の所感を振り分けて語っている。

いずれにしても岩井その人が書き、語ったものなので、資料としてはまず第一級にぞくする。よってこの二つから、興味のある部分を紹介してゆくことにしたい。

広島丸が目指したのは、平壤の南を流れる大同江河口の小村・簗津浦で、二人はそこから上陸した。簗津浦には第一軍の軍司令部があったからで、軍司令官はこの戦争のための軍備拡充の「起案者」ともいうべき大将山県有朋である。

第一軍は八月一日の宣戦布告をまっぴら、京

城西方の仁川港から上陸した。そして清兵を北方に駆逐しつつ北上して平壤を陥落させ、慰問使の一行が朝鮮の土を踏んだ十一月末頃には、第一線の一部は早くも鴨緑江に到達していた。日本軍が決戦を企図していた清領の直隸平野を望むのは、もう一息のところにあつたのである。

簗津浦で二人は山県に会い、従軍の挨拶をしたが、智海は、山県が日本の農家でいえば灰小屋のようなところを長官室にあてていたことと、山県の篤志で次の地点まで川蒸気で行けることになったと記すのみで、このいつも暗い顔つきをした権力志向者については、何の感想も洩らしていない。

こうした書き方が、じつは彼の日記の特色をなしていた。接触を深めた将官もいたであろうに、ほとんど名前を記す程度にとどめているのである。彼がいくぶんの感情を交えて

書くのは大佐どまりまで、そして筆の大部分は、下士官を含む兵士と若干の下級将校に費やされていた。この視点は、なんとなく彼の関心の有りどころをしめして、興味深い。荻原と智海は、この簗津浦から鴨緑江をこえて——ということは国境をこえてということだが、清国領の海城まで、六十八日間をかけて、北上することになる。

その間、副使で年少者である彼が雑用をまかなう役割を担っただろうことは想像に難くないが、彼自身が従軍の終末に近づいたある日、そのことを記しているので、転載しておくことにする。

『予は副使となり、着韓以来七台の車に（慰問品等を）積載し、身は恰も軍夫の如く、監視兵の如く、荷物を保管し、韓人を叱咤し、清人を疾呼し、言語は通ぜず

道路は暗し、朔風凛烈を侵して、雪山を越え、氷川を渡り或は運送不便の爲めに、兵站部は山丘の如くに荷物停滞する時に際しては予等の荷物の如きは、容易に運搬する能はざる困難の場合に接し、或は日西山に没しては道に迷ふて苦み、或は宿舎なきに茫然たる如き、予の如きは凡そ自ら軍人の艱苦、軍夫の労働等を実験して漸く今日を以て完結せり。此に於てか双肩の重荷を下したる心地、且つは兵士の我が浄土宗僧侶及清信者の好意に感泣せらるるを見て、百日の労働頓に夢消し、神氣爽然一層の勇を増し来り思はず快を叫んで踊躍せり』(岩井智海著「道しるべ」)

一行が何よりも苦しんだのは、内地では想像もできなかった大陸の寒気のものすごさだ

った。岩井はそれをしばしば経験していたが、大陸の寒気は突如としてやってくるので、これには閉口したと語っている。十二月十三日に清領の鳳凰城近くで経験したのがそれで、その日の『午前まではさして寒いとは思いませぬが、午参一時頃からと云うものは頓に氣候が一変し、今まで自由に進退しておった我々の身体は殆ど氷の如くになりました』(岩井智海講演「従軍実況の所感」というのである。そしてそれがその年の寒気襲来の最初だったと語り、一夜で凍傷兵が千人もでた紅瓦塞の戦闘の話や、一個中隊百五十名のうち無事だったのは三名だけ、あとは全部、凍傷患者となった鳳凰城の戦いの挿話などを紹介している。

事実、日清戦争での日本側の死者は一万七千余名だったが、そのうちの一万一千名以上が、凍傷にもとづく病死だったと見込まれて

いる。

日本陸軍は対清戦争を覚悟してからは、将校数人を北鮮や清国に潜行させて兵要地誌を収集させているのだが、どうやら気候は直接戦闘と関係ないということで、ほとんど無視されたのであろう。この悪癖が太平洋戦争にもおよんでいたことは、よく知られるところである。

(つづく)

(注1) 袁世凱(一八五九—一九一六)は河南省

生まれ。清国末期の権謀術数家。朝鮮で起きた一八八二年の壬午の軍乱、八四年の甲申事変に活躍して朝鮮を清の属国とした。これが日清戦争の遠因となる。日清戦後は新軍の養成につとめ、戊戌の政変では改革派を弾圧して山東順撫に昇進した。一九〇〇年に義和団

(注2)

事件が起きるとこれを弾圧して直隸總督となり、ついで軍機処大臣などを歴任したが、満人貴族に警戒されて免職となる。一九一一年の辛亥革命では清国総理大臣となって軍政兩權を掌握、革命軍と取り引きして清朝を終わらせ、自ら臨時大總統となり、その二年後には革命派を弾圧して正式に初代大總統となつて專制政治をしいた。一九一五年、日本の押しつけた二十一カ条をのむ一方で反日機運をつくり、帝政をして帝位につこうとしたが、第三革命で挫折、憤死した。

「王法為本」はおもに真宗という説で、出世間の立場では仏法を基本として如来の救済を仰ぐが、処世面では王の統治する國家の法に従うのを第一とする考え方。

◇◇◇新刊紹介◇◇◇

寺内大吉のライフワーク

寺内大吉 著

『立ち止まるな善導』

歴史像でとらえた念仏者・善導!!

法然「偏に善導一師に依る」、親鸞「善導独り仏の正意を明かせり」。日本浄土教に決定的影響を与えた中国唐代の念仏僧と時代背景を描く——好評の本誌連載の長編!!

A5変型 四七四ページ 定価一八〇〇円

《発行・発売》

毎日新聞社

〒100-51 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
TEL (03) 2211-0311

舞見御中

埼玉工業大学 松川 文豪	淑徳中学校校長 淑徳高等学校校長 里見 達人	〒174 東京都板橋区前野町五一四一 鎮西学園理事長 鎮西高等学校校長 真和高等学校校長 上田 祐規 〒862 熊本市九品寺三一〇一一 電話 三六四一八一七六	東山学園 学園長 石井俊恭 常任理事 山崎宏賢 西出澄弘
上宮学園 理事長・学園長 鵜飼隆玄 高等学校校長 鵜飼光順 〒543 大阪市天王寺区上之宮町三一六	鎌倉大仏殿 高德院 住職 佐藤 密雄 〒243 鎌倉市長谷四一二二八 電話 (〇四六七)二二一〇七〇三	法然上人御降誕地廿五霊場第一番 中国三十三観音特別霊場 誕生寺 岡山県久米郡久米南町里方 電話 〇八六七二八一二〇二	浄土宗宗務総長 大田 秀三 〒370 高崎市通町九〇 安国寺 慈光ビル(〇二七三)二三一四〇〇〇
寺内大吉	大原山 西福寺 鵜飼隆玄	萩市 常念寺 老隠 古本 超然	華陽院 堀田良謙 〒420 静岡市鷹匠二一二四一八

舞見御中

龍泉寺住職 伊東 康雄 〒107 東京都港区南青山二一八一二五	大本山光明寺執事長 西念寺 北邨 謙順 〒150 南足柄市沼田三一五 電話 〇四六五(七四)〇五八八	回向院住職 本多 義敬 〒130 東京都墨田区両国二一八一〇	稲田 稔界
おてらはみなさんの相談所 桜と観音さまのお寺 浄心寺 小池 政雄	函館称名寺 須藤 隆仙 〒040 函館市船見町一八一四	中島 真哉 青山 梅窓院 〒107 東京都港区南青山二二六二三八	教安寺住職 野呂 幸進 〒210 川崎市川崎区小川町六一二 電話(〇四四)二二二一四九四六
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二一三六一一 清岸 寺 原口 徳正	松庵寺内無為窟主 小川 金英 〒025 花巻市双葉町六一四 仏教福祉センターによる銀行	正覚寺住職 楠美 知行 〒030 青森市本町一一一一二	サンガ真仏教舎本部長 大善寺住職 裏辻 賢洲 〒113 福岡県宗像郡福岡町松原区

舞見御中署

法然上人二十五霊場 第二番仏生山法然寺 細井俊明	伝通院住職 吉川哲雄 〒112 東京都文京区小石川三一四一六	圓光寺住職 加藤順底 〒020 盛岡市南大通三一―一四九	北川一有 長寿院 〒114 東京都台東区鳥越二―一三一八
昌清寺 住職 服部光順 前住職 服部仙順 〒113 東京都文京区本郷二―八―三	檀王法林寺 だん王子供の家 信ヶ原良文 京都市左京区川端通三条上ル	群馬教区長 野口善雄 〒376 桐生市本町六―三九八 浄運寺	西住院 戸川靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二二―四 電話(〇二八)二二二―〇八〇二	芳泉寺 柳楽真純 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三―七―四八	光明寺 白幡憲佑 〒232 横浜市南区久保山	悟真寺 住職 立松 辨成 〒440 豊橋市関屋町二二―一 電話(〇五三)五二―五五六六

舞見御中署

遇斯庵主 谷地益雄 〒045 岩手県花巻市四日町一―一二四七 廣隆寺内	晴雲寺 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六―五	浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林忍戒	九品仏浄真寺 清水順碩
お骨仏の寺 一心寺 貫主 高口恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪二―八―六九 電話(〇六)七七一一〇四四四(代)	宗源寺 斎藤价洲 〒110 東京都台東区東上野五―一―六	大松寺 酒井亮貫 〒108 東京都港区三田四―一―三八	新善光寺住職 太田隆賢 〒064 札幌市中央区南六条西一丁目
光心寺 北山良祐 〒425 焼津市東小川一丁目六一―一	正雲寺 〒980 仙台市新寺五―八―三七	雲上寺住職 東海林良雲 〒985 塩釜市南町二―一―一	法然上人鑽仰会

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十五巻 八月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

平成元年七月二十五日 印刷
平成元年八月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六
発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒101 振替東京八―八二―八七番

舞見御中署

総本山 知恩院

門主 藤井実應

大本山 増上寺

法主 中村康隆

大本山 金戒光明寺

法主 稲岡覚順

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山 善導寺

法主 藤堂俊章

大本山 光明寺

法主 藤吉慈海

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

〒170

東京都豊島区西巢鴨三二〇一

大正大学

電話(〇三)九一八七三二一代表

〒603

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九二一二四一代表
通信教育部 四九二一〇二三九

学校法人 大乘淑徳学園

淑徳短期大学

理事長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五十三一七

京都文教短期大学

学長 大橋 俊 有

〒611 宇治市横島町八〇